



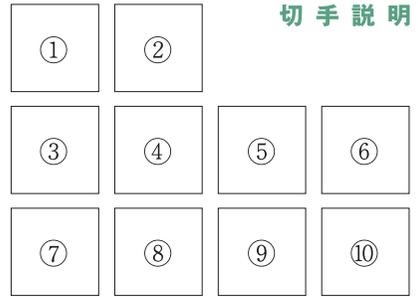
青春の 寺山修司

〈資料提供〉

テラヤマ・ワールド／寺山修司記念館／寺山映子

小学校4年から中学2年までの多感な少年時代を三沢で過ごした寺山修司は、昭和24年夏、母が九州に働きに行くことになり、青森市の親戚が経営する映画館・歌舞伎座に引き取られる。そこで見た映画や芝居は、その後の寺山作品に色濃く影響を及ぼす。転入した野脇中学校で、京武久美と出会い、その影響で俳句を作るようになる。続いて進学した青森高校では、青森高校文学部会議を組織し、京武、近藤昭一、塩谷律子らと「魚類の薔薇」「麦唱」「青い森」などを発行。全国の高校生に呼びかけ「初めての十代の俳句研究誌」も創刊した。昭和29年4月早稲田大学教育学部国文学科に入学。18歳の寺山修司は「チェホフ祭」で短歌研究新人賞特選を受賞し、歌壇に鮮烈にデビューする。学生時代、ネフローゼで入院生活を余儀なくされるも、短歌研究編集長だった中井英夫の好意で昭和32年に、作品集「われに五月を」、詩集「はだしの恋唄」を刊行した。退院後、寺山修司の創作意欲は堰を切ったようにジャンルを超えて溢れ出す。俳句、短歌、詩の世界から、ラジオ、テレビ、映画、演劇と拡大し、「演劇実験室◎天井桟敷」創立に向かうのである。

切手説明



- ① 寺山修司の恩師、中野トクへ送られたはがき。(昭和31年8月30日消印)
- ② 牧羊神 VOL.7 (昭和33年1月31日発行)
- ③ 「短歌研究」の編集長であった中井英夫に送ったはがき。
- ④ ネフローゼから退院後の寺山修司 (昭和33年)
- ⑤ 青森高等学校文化部作品集「麦唱」の麦唱詩集の冒頭にある誌 (昭和27年10月5日発行)
- ⑥ ネフローゼで新宿区にあった社会保険中央病院に入院中のスナップ (昭和30年)
- ⑦ 早稲田大学入学直後の寺山修司 (昭和29年)
- ⑧ 寺山修司記念館の展示引き出しの一部
- ⑨ 青森高校時代のスナップ写真
- ⑩ 羊神の同人であった山形健次郎氏に宛てた年賀状

〈切手シート上部写真〉

二重橋前で撮影された「演劇実験室◎天井桟敷」創立時の人々 (昭和42年／撮影：須田一政)

〈切手シート上部右下の手紙〉

昭和24年(13歳)九州の母へ宛てた手紙の一部。

寺山修司略年譜

- 1935 (昭和10年) 0歳
12月10日、寺山八郎、寺山はつ子の長男として青森県弘前市紺屋町に生まれる。
- 1945 (昭和20年) 9歳
青森市大空襲で焼け出される。三沢駅前、父方の伯父の営む寺山食堂の二階に間借りをする。
- 1948 (昭和23年) 12歳
三沢の古間木中学校に入学。
- 1949 (昭和24年) 13歳
青森市の母方の叔父夫婦(映画館歌舞伎座を経営)宅に引き取られる。
- 1951 (昭和26年) 15歳
青森高校に入学。新聞部、文芸部に参加する。
- 1954 (昭和29年) 18歳
早稲田大学教育学部国語国文学科に入学。「チェホフ祭」で第二回「短歌研究」新人賞受賞。
- 1955 (昭和30年) 19歳
ネフローゼを患い、新宿の社会保険中央病院に生活保護を受けて入院。
- 1958 (昭和33年) 22歳
第一歌集「空には本」(の場書房)刊。
- 1960 (昭和35年) 24歳
長編戯曲「血は立ったまま眠っている」を劇団四季にて上演。篠田正浩監督の長編映画「乾いた湖」のシナリオを書く。
- 1963 (昭和38年) 27歳
九條映子と結婚。「現代の青春論」(三一書房)と題して「家出のすすめ」をまとめる。
- 1967 (昭和42年) 31歳
横尾忠則、東由多加、九條映子らと演劇実験室「天井桟敷」を設立。
- 1969 (昭和44年) 33歳
渋谷に天井桟敷館及び地下小劇場落成。作詞したガルメン・マキの「時には母のない子のように」が大ヒットする。
- 1972 (昭和47年) 36歳
ミュンヘン・オリンピック記念芸術祭にて、野外劇「走れメロス」を上演。
- 1974 (昭和49年) 38歳
長編映画第二作「田園に死す」(芸術祭奨励新人賞)を脚本監督。
- 1975 (昭和50年) 39歳
東京・杉並区で市街劇「フック」上映中に、警察が介入、新聞の社会面ににぎわす。南仏ツロンの「若い映画」祭でマルグリット・デュラスと共に審査員をつとめる。
- 1976 (昭和51年) 40歳
渋谷の天井桟敷館閉館。新たに元麻布に開館。
- 1982 (昭和57年) 46歳
長編映画「さらば箱舟」(脚本・監督)で沖繩ロケ。谷川俊太郎とビデオレターの交換をはじめめる。
- 1983 (昭和58年) 47歳
絶筆となったエッセイ「墓場まで何マイル?」を書く。5月4日午後0時5分、肝硬変と腹膜炎のため敗血症を併発、死去。享年47歳。